

# 実践レポート／ 探究の窓

VOL.10

本格実施から丸3年が経った「総合的な探究の時間」。  
現場で試行錯誤が続くなか、  
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

## ● 年間スケジュール (普通科)

### 地域を知り、地域の 課題解決策を提案する

1年

7つの分野別グループに分かれ、「地域課題解決プロジェクト」に取り組む。夏休みには現地調査を実施。役所や事業所などを訪れ、地域で活躍する大人の話を聞く。そこで見えてきた現状・課題に対して解決策を考案し、地域の方々に向けて発表する。

### 地域から都市へと拡張し、 コンテストにも挑戦する

2年

修学旅行と組み合わせ、対象エリアを地域から都市へと拡大。都市について調べ、自ら課題を見出し、フィールドワークを交えつつ理想のまちづくりについてアイデアを考案していく。秋以降は、探究のコンテストへの応募を通じて、まとめ・発表に取り組む。

### 進路と社会課題を結びつけた 個人探究を論文にまとめる

3年

進路と社会課題を結びつけた個人探究を行い、探究論文としてまとめる。来年度については3年次の内容を精査し、進路や大学入試も見据えた一貫性のあるカリキュラムに改変していく計画。

#### School Data

1976年創立／普通科・情報コミュニケーション科／生徒数823人(男子450人・女子373人)／進路状況(2025年 3月卒業)大学115人、短大13人、専門学校81人、就職46人(公務員24人・民間22人)

カリキュラムの確立に向け、  
探究学習の変革に取り組む

情報コミュニケーション科を有し、国内の公立高校で最も早く全生徒に一人一台のiPadを導入した袖ヶ浦高校。同科においては、かずさDNA研究所、東京情報大学、麗澤大学などの研究機関や、(株)田上

袖ヶ浦高校(千葉・県立)

## 地理総合・情報Ⅰと連携 した地域課題探究で、 刺さる解決策を提案



写真左から、総探究研究会・1年生学年主任の石川陽一先生(地歴公民科)、同・1年生副担任で総探究担当の星野憲一先生(英語科)。

重機開発などの企業との連携が進み、課題研究にも積極的に取り組んできた。一方、普通科においては、「探究学習をどう進めればいいのかわからない状態で、学年ごとに取組にバラつきがあった」と1年生の学年主任を務める石川陽一先生は振り返る。転機となったのは、小山雄一郎校長の着任だ。地域とつながる探究学習に取り組もうという校長の呼びかけの下、2024年度より総探究委員会を中心に挑戦が始まった。「将来的に地元に戻ってくる生徒が多いので、地域について理解を深め、地域で活躍する大人との出会いを大事にしたいと考えた」と石川先生。石川先生と同じく総探究研究会に所属し、長く民間企業で働いてきたキャリアをもつ星野憲一先生は、「学校の外に出て学び、地域や社会について自分たちで考える、授業以外の学びを実現したかった」と振り返る。

「まさに変革期の真只中」と石川先生が言うように、現在は試行錯誤を重ねながら実践を続けている。1年目の2024年度は、1年次の総合的な探究の時間のカリキュラムを一新。「袖ヶ浦魅力度アッププロジェクト」と題して、袖ヶ浦市の行政や事業者を訪問して課題を聞き出し、解決策を提案した。2年目の2025年度は、前年の反省を踏まえて1年次のカリキュラムをブラッシュアップし、2年次のカリキュラムを1年次からの継続性があるものと改めた。

### 1年次夏休みの現地調査で 地域・社会のリアルに触れる

2025年度の1年次の探究学習は、「地域課題解決プロジェクト」と改称し、袖ヶ浦市に加えて木更津市、君津市、市原市、富津市など、生徒の居住地域にまでエリアを拡大。各自の興味・関心により学年全体で7つの分野別グループ(まちおこし／人口減と教育／環境／防犯・防災／みんなの健康／歴史・伝統文化／超高齢社会)に分かれ、班を形成して地域の課題を探っていく。各グループは35名前後で、副担任(メイン・担任(サブ)の2名体制で担当する。夏休みには地域での現地調査を実施。班ごとに企業や市役所、施設などを訪れ、現場で活躍する人たちの話を聞く。そして、現地調査を通して見えてきた現状や課題を、11月の中間発表でグループ内で共有。班別発表会を経て、2月の全体発表会では各グループで選ばれた班が、夏休みに訪れた事業所や行政、地域住民の方々の前でプレゼンテーションを行う。

肝となるのが、夏休みの現地調査だ。市役所や高齢者向け福祉施設、商業施設などのほか、東京ガス、日本製鉄、小湊鐵道といった企業の事業所も訪れる。「地域の





生徒(1年生)に配布している総合的な探究の時間のオリエンテーション資料。年間の流れや探究学習の意義、7つの分野の具体的な説明などがコンパクトにまとめられている。



左上：地理総合で生徒が作成した地域の現状と課題を描いた紙芝居。グループ内で発表し合った。右上：中間発表会の様子。現地調査で聞いた話や課題、自分の意見などについて順に発表し、他班のメンバーと共有した。左下：夏休みに「超高齢社会」グループのある班が訪れた、特別養護老人ホームでのワンシーン。右下：「歴史・伝統文化」グループが訪れた市原歴史博物館での意見交換の様子。

### 地理総合と情報Ⅰと連携し、教科横断型の探究を目指す

「地理総合」と「情報Ⅰ」との教科連携で行っている点も、地域課題解決プロジェクト（総合的な探究の時間）の特徴だ。地理総合では、5・6月に「地理的な課題と地域調査」という単元に取り組み、生徒たちは自分が居住する市町村について、数名のグループごとに現状や課題を調べ、紙芝居にまとめて発表する。一方、総合的な探究の時間については、4・5月は探究学習のガイダンスにあって、6月から地理総合の流

こと、会社のこと、高齢者のこと…インターネットで調べるだけではわからない、リアルを知ってほしい」と石川先生。「生徒は最初は及び腰だったが、現地では目を輝かせて話を聞いていた姿が印象的だった」と星野先生。そして、今年度はより充実した内容となったと、石川先生は振り返る。

「昨年度は生徒に任せすぎたこともあり、私たち教員から訪問先への説明が足りず、特に企業では、会社説明会のような内容になっていました。その反省を踏まえ、今年度は探究学習の趣旨や目的を説明し、何を知らたいのかを丁寧に伝えて理解していただきました。例えば、東京ガスを訪問したのは環境グループの生徒たちで、環境についての取組や課題について話を聞き、演示実験を経験させてもらうことができ、実りある学びの場となりました。外部との連携においては、自分たちが何を求めているのかを明確に伝えることが重要だと、改めて気づかされました」

これを受けて本格的に地域課題解決プロジェクトを開始する。さらに、プレゼン資料の作成に使うソフト「Keynote」の使い方は、2学期初めに情報Ⅰの授業内で学ぶ。地理総合を担当する石川先生は「学習指導要領にもあるように、さらなる教科横断型の探究を目指したい」と話す。

11月の中間発表では、班ごとの現地調査でわかったことや見えてきた課題、それに対する解決案・行動案について、各自がNotionで作成したプレゼン資料を使って発表する。各班が順に発表するのではなく、異なる班のメンバーでグループを組み、それぞれの訪問先での課題についてグループ内でシェアするスタイルをとっている。

1年次に袖ヶ浦魅力度アッププロジェクトに取り組んだ今年度の2年生は、探究学習の対象エリアを地域から都市へと拡大。沖縄への修学旅行と組み合わせたグループ探究プログラムとなっており、沖縄やほかの都市について調べ、自ら課題を見出し、フィールドワーク（修学旅行）を交えつつ理想のまちづくりについてアイデアを考察していく。秋以降は、探究のコンテストへの応募を通じて、発表のフェーズへとシフトしていく。

「全員が自分の言葉で発表する機会を設けるため」と星野先生。「しっかりと発表ができるのか心配だったが、杞憂だった。生徒の努力が見えたので、最終発表に向けてがんばってほしい」と期待を寄せる。

3年次については、これまでは進路と社会課題を結びつけた個人探究を行い、探究論文としてまとめる活動に取り組んできた。今年度も同様の予定だが、学年により取組状況に差があり、「3年間を見通したカリキュラムを構築するのが今後の課題」と石川先生は指摘する。

中間発表後、星野先生が生徒たちに贈ったのが、「訪問先でお世話になった人たちの顔を思い浮かべて、相手に刺さるような提案をしてほしい」というメッセージだ。「昨年度は深掘りが足りず、バツと思いついたような安易なアイデアも少なくありませんでした。高校生が根本的な課題解決策を提案するのは難しいとしても、しっかりと考えて大人をハッとさせるようなアイデアを提案してほしいし、大人からポジティブなフィードバックがあれば生徒は嬉しい自信がつくはず。探究を通して生徒がリアルな課題解決のプロセスを経験し、行政や企業の方に『卒業したらあの生徒に

来てほしい』と言ってももらえるようになるのが理想であり夢ですね」

### 3年貫通のカリキュラム構築が課題。学科間連携も強めたい

「1年次はある程度まで教員がお膳立てをして生徒に課題を提示しています。一方、2年次には対象となる都市や課題は自ら見出すことを課し、主体的な活動を促しています。来年度以降は、3年次の内容を精査し、進路や大学入試も見据えた一貫性のあるカリキュラムに改めていく計画です。また、これまでほぼ接点が多かった情報コミュニケーション科との連携を強め、大学や研究機関とのつながりを普通科にも広げていくとともに、提案したアイデアを実装していきたいと考えています」



## まとめ

### 袖ヶ浦高校の探究のモットー

インターネットではわからない、  
地域・社会のリアルに触れる

#地域課題解決 #現地調査 #大人との出会い #教科連携 #アイデアの提案と実装

#### 7つの分野の枠組みを 参考に、課題を設定する

「7つの分野：まちおこし／人口減と教育／環境／防犯・防災／みんなの健康／歴史・伝統文化／超高齢社会」＋「具体的なワード」を参考に、関心のある分野に絞ったうえで課題や問いを定めていく。

#### インターネットに頼らず 多様な手段で情報を収集する

インターネットによる情報収集に頼る危うさを理解し、夏休みの現地調査やインタビューのほか、図書館の利用、アンケート調査の実施など、多様な手段を用いて情報を収集する。

### 課題の 設定

### 情報の 収集

### まとめ・ 表現

### 整理・ 分析

#### 地域課題の解決策を 地域の大人に向けて発表する

11月の中間発表会を経て、1月にはプレゼン資料を完成させ、班別発表会で発表。2月の全体発表会では、地域の行政や事業者の方々をゲストに迎え、各グループから選ばれた代表班が発表を行う。

#### 事実を見極めて掘り下げ、 課題の本質を洗い出す

まずは、集めた情報のうち「事実」と「そうでないこと」を区別。次に、「事実」について分析し、「なぜ～なのか?」「どうしたら～になるか?」と深掘りしつつ、仮説や課題を考えていく。

#### 探究設計のPOINT

POINT ① 地理総合と連携した調べ学習で、  
地域の現状・課題を知る

POINT ② 地域で働く大人の話を聞き、  
リアルな課題に触れる

POINT ③ 課題を分析して深掘りし、  
解決策を考え、提案する

#### 評価基準

中間発表などの際は生徒が生徒を評価するため、生徒用のルーブリックを作成。①主張・発表のわかりやすさ、②視覚情報・資料の取り扱い、③プレゼンテーションの全体構成、④発表の態度の4観点について、A～Dの状態を具体的に記して提示している（A以上のSも設置）。

中間発表評価表

ダウンロード可

観点	説明	S	A	B	C	D
① 主張・発表のわかりやすさ	伝えたい内容や知ってほしい内容をターゲットに絞って整理でき、聞き手が理解しやすいようにまとめている。	伝えたい内容や知ってほしい内容をターゲットに絞って整理でき、聞き手が理解しやすいようにまとめている。	伝えたい内容や知ってほしい内容をターゲットに絞って整理でき、聞き手が理解しやすいようにまとめている。	伝えたい内容や知ってほしい内容をターゲットに絞って整理でき、聞き手が理解しやすいようにまとめている。	伝えたい内容や知ってほしい内容をターゲットに絞って整理でき、聞き手が理解しやすいようにまとめている。	伝えたい内容や知ってほしい内容をターゲットに絞って整理でき、聞き手が理解しやすいようにまとめている。
② 視覚情報・資料の取り扱い	視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。
③ プレゼンテーションの全体構成	プレゼンテーション全体を通して、視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	プレゼンテーション全体を通して、視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	プレゼンテーション全体を通して、視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	プレゼンテーション全体を通して、視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	プレゼンテーション全体を通して、視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	プレゼンテーション全体を通して、視覚的な情報や資料を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。
④ 発表の態度	発表者の態度がプレゼンテーションの内容を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	発表者の態度がプレゼンテーションの内容を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	発表者の態度がプレゼンテーションの内容を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	発表者の態度がプレゼンテーションの内容を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	発表者の態度がプレゼンテーションの内容を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。	発表者の態度がプレゼンテーションの内容を効果的に活用でき、伝えたい内容をわかりやすく整理できている。